
モンスターハンター ～栄光の狩人日記～

アクア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

モンスターハンター ～栄光の狩人日記～

【Nコード】

N6705S

【作者名】

アクア

【あらすじ】

人々は近くに住むモンスターに日々恐れ、生活していた。舞台はユクモ村。ある日、ユクモ村は1体の強力モンスターに襲われた。

そしてその襲撃により村は壊滅状態へと陥られた。そんな時、ある1人の少年がやってきてこの村でハンターを始めると言い出す。

そしてこのユクモ村はこの少年の力で少しずつ変わっていくのだった…。

受験生のため更新速度はすごく遅めです。

おそらく2～3日に1話ぐらいかと。また1話が短いことも多いで
す。

その辺は予めご了承ください。

プロローグ

ここはユクモ村。

現在の天気は大雨。暴風付きだ。

しかしつい30分前は晴天だった。

そして村は風と雨により家などは吹き飛ばされていた。

「ユクモ村は終わりだ！」

「いや、世界は終わるぞ。」

さまざまなことを話す村人たち。

村人たちは遠くの村へと避難するのだった…。

- - - - - 次の日 - - - - -

嵐のような暴風雨はすでに通り過ぎていた。

そしてそこにはほとんどの跡形もなく吹き飛んでいた。

この暴風雨を引き起こしたモンスター。それはアマツマガツチである。

村人たちは呆氣にとられる。

「俺たちは…どうすれば？」

ただそれしかいうことが出来なかった。

プロローグ（後書き）

プロローグというプロローグでもないですね。
主人公たちが登場するのは第1話からです。

ではこれからよろしくお願いします！！

第1話 歩く少年

今日は晴天。雲1つない青空である。
そんな中、1人の少年が歩いていた。
隣には荷物をひいているアプトノスがいる。

「ユクモ村ってどこだよ!？」

そんなことを言っている。

この少年はリーブル。背中には大きな太刀を背負っている。
銘はユクモノ太刀という。

これから行くユクモ村にて作られている太刀である。
防具はレザーシリーズ。ハンターになったばかりの人がよく身につけている。

採取能力に優れている。

この装備からわかるようにリーブルは駆け出しハンターである。

「おい、アプトノス。お前が喋ればな。」

リーブルは何だかんだで3時間近く歩いている。
距離にしたら何kmぐらいだろうか。既にそれすらも考える気力がない。

そんな状況で1人と1匹で黙々と歩いている。
黙々と歩いてさらに3時間が経った。まだユクモ村には着かない。
日が沈んできたので今日は野宿をすることにした。

「何食うかな。」

こんなに時間がかかるとは思っていなかったので大した食料は持っ

てきてない。

リーブルはアプトノスを杭に縛り、あまり動けないようにする。

「しょうがない、近くのガーグアでも狩るか。」

ガーグアとは溪流に棲息する鳥竜種のモンスター。

羽こそあるものの飛ぶことは出来ない。

そのため初心者ハンターでも簡単に狩ることが出来る。

リーブルはガーグアを探していると3体のガーグアがたむろっていた。

「あんまり腹減ってないし、1体でいいか。」

そつと近づいていく。

ある程度距離を詰めるとそこから走り、一気に太刀を振り下ろす。

その太刀は無事ヒットした。しかし武器が弱いいため一撃では倒れない。

「だったら連続攻撃だ！」

ガーグアは逃げ出そうとしたがリーブルの連続攻撃によりすぐに倒れこんでしまう。

リーブルは剥ぎ取りナイフを出すとガーグアを剥ぎ取る。

無事に生肉をとることが出来た。

「よし、生肉ゲット！！あとは焼くだけか。」

焼くとは火を使ってあぶること。当たり前か。

リーブルは肉焼きセットを取り出す。

肉はよく焼くので失敗することはほとんどない。

火をつけ肉を焼き始めた。

「上手に焼けました!!」

しばらく経つと誰もいないのにリーブルはこう言う。
もう癖になっているようだ。

「では、いただきまーす。」

嬉しそうな顔でほおばる。

意外と大きいので食べるのに時間がかかる人はかかってしまう。
しかしリーブルは少食だが早食いなのですぐに食べ終わる。
ちなみに早食いスキルはついてない。

「明日には着くのか。てかつかないとまずいな。」

そんなことを考えながらリーブルは明日に備えてそそくさと寝る準備を始める。

ふとアプトノスを見る。なんだか落ち着かない様子だ。

「どうした、アプトノス？」

アプトノスなどがそわそわするということは近くにモンスターがいることがある。

リーブルは周りを見るがそれらしき姿はない。

「安心しろ、アプトノス。ジャギイぐらいなら襲ってきても狩れるから。」

リーブルがそういってもアプトノスの様子は変わらない。

しかし気にしててもラチが明かないのでリーブルは寝ることにした。

「じゃ、お休み。アプトノスー!!」

リーブルは眠りについたのだった。

第1話 歩く少年（後書き）

主人公の名前はリーブルです。
微妙ですかね？

次回は大型モンスター登場予定。
感想待ってます！！

第2話 咆哮

現在夜中の3時。リーブルは爆睡している。
ちなみに今リーブルが寝ているのは草原の上。
目の前には大きな池みたいのがある。
エリアで言うところである。

「ぐおおおおおおおおおー！！！」

何かの咆哮だろうか。それが聞こえる。

リーブルはそれを聞くと、起きてしまう。

「ん？なんだ今の咆哮は？」

リーブルは周りを見渡す。

しかし何の姿もない。ただ・・・雷光虫がものすごい増えている。
そのせいで夜なのになんか明るい。

「大雷光虫になるのか？」

大雷光虫。雷光虫が集まって作る一種のモンスターだ。
集まっても虫は虫。そんなに恐れるほどではない。

「でも大雷光虫はそんな咆哮しないか。」

リーブルは考える。確かにそうだ。
アプトノスを見る。寝る前以上に怯えている。
やはりここに何かがいるのだろうか？

「大型モンスターかもしれないな。
そいつが来る前に安全そうな場所へ行くか。」

リーブルはアプトノスを止めている杭を外し、そして歩き出す。

「とはいってもどつちが安全なんだろうな。」

下手に動くと大型モンスターにばったり遭遇する恐れがある。
それじゃなくてもジャギイの群れなどに遭遇することもある。

さらにリーブルは咆哮を聞いたとき意識は確かではなかったのだと
ちからから聞こえたかもわからない。

「しょうがない。勘でいくか。」

リーブルは太刀を抜くと、剣の先を下に向ける。
そして柄を離すと剣は倒れる。

この方法、数学的に言うところ「同様に確からしい」とは言えないだろ
う。

まあその辺は気にしない。

「あつちか。」

剣が倒れたのはエリア的に言うとエリア4。
もちろんリーブルには分からない。

「よし、行くぞー!!」

リーブルはアプトノスとともに歩き出す。

エリア7とエリア4の間はものすごく長い。

エリア移動を終え、エリア4に着く。

ちなみに5分ぐらいかった。

「どこにも大型モンスターはいなさそうだな。でもジャギイが3体。

」

リーブルはそう呟くと剣を引き抜き、ジャギイに近づく。

1体のジャギイがこちらに気付く。しかし臆しない。

リーブルはまず近くの1体を斬りつける。

しかしその程度では倒れない。3体ともこちらに気付いたようだ。

さすがに1対3なのでゴリ押しは厳しい。

回避を交えて戦う。

「やっぱジャギイでも多いとキツイな。」

リーブルは意外と苦戦をする。

しかしなんとか2体を倒す。

「あとはお前だけだ。」

仲間を2体も倒されたジャギイ。もう自棄になっているのだろうか？
こちらに向かってくる。

リーブルはそれを悠々避けると後ろに回り込み、そして太刀を振り下ろした。

ジャギイは倒れる。そしてもう立ち上がることはなかった。

リーブルは3体の剥ぎ取りを済ますとアプトノスのもとへ向かう。

「じゃあ行くか。」

リーブルは高台に向かって歩き出す。

あそこなら安全だと考えたのだ。しかしその時だった。

「ぐおおおおおおおおおー！！！」

後ろでさっきとまったく同じ咆哮が聞こえる。
おそろおそろ後ろを見る。

そこにいたのは…青いボディ。所々黄色い箇所もある。
角は短いのが2本。爪も鋭そうだ。

リーブルは体が硬直した。

「まずい…こいつはすごく強そうだ。」

リーブルは見た目からでもそれが分かった。
アプトノスを急いで高台のほうへ逃がす。

「アプトノスが逃げ切るまで頑張って時間稼ぐか。」

リーブルはそう決めた。

まともに戦っても勝機はないと判断したのだ。
剣は抜かず、回避に徹しようという事だった。
相手がこっちへ走ってくる。

「速い！？」

リーブルはなんとか左に避ける。

相手はすぐに向き直るともう1度走ってくる。
これも何とか避ける。

「クソッ、このままじゃいつかは喰らうぞ。」

リーブルは考える。しかし何も思いつかない。

ポーチに入っているのは肉焼きセツと回復薬が少し、そして閃光玉が2つ、砥石などだ。

閃光玉を投げることも考えたが今投げたら逃げてるアプトノスも閃光玉を食らい、意味がないことになる。

「しょうがない。このまま避けるしかなさそうだ。」

リーブルは相手に向き直った。

第2話 咆哮（後書き）

微妙なところで切ります。
次回、新キャラ登場予定。

感想待ってます！！

第3話 双剣使い、現る

相手は果敢に攻撃を仕掛けてくる。

「クソッ、避けるので精いっぱいだ。」

リーブルはあれからずっと回避をしていた。
アプトノスの避難は終わっているだろう。

しかし閃光玉を投げる隙がなければ逃げる隙もないのだ。

「このままじゃいつか一撃を喰らう…。」

リーブルは内心で思っていたがしかしどうすることも出来ない。
しかしスタミナのほうは限界に来ていた。

「クッ、足が動かな…。」

リーブルはついに転んでしまう。
そして相手の腕が自分の頭上に来た。

「お、終わった…。」

リーブルは思った。
しかしそこに声が響く。

「目を睨れ!!」

リーブルは訳が分からなかったが、とりあえず目を睨った。

目を閉じていても閃光玉を投げたのはわかった。
目を開くと相手は目が眩んで、闇雲に動いていた。

「早く逃げるんだな。あいつは俺の獲物だ。」

少年は言った。

武器も防具も見たこともない。

だが武器が双剣を使っているという事だけはわかる。

「あ、ありがとうございます。」

リーブルはそういつとアプトノスが逃げて言った方向へ走る。

「そっちへ行ったらさらに上へ行きな。そこにベースキャンプがあるよ。」

「は、はい。」

リーブルはそう返事をする走り去っていった。

「ジンオウガ・・・、貴様は俺が狩ってやるぜ。」

少年はジンオウガを見る。

ジンオウガはすでに閃光が解けていた。

そして少年はジンオウガへと向かっていった。

-----リーブル視点-----

俺は必死に逃げた。

後ろを振り向くことが出来なかった。

ジンオウガの目が眩んでいたのは分かっている。

でももう一度振り向くと恐怖で動けなくなりそうだったのだ。

走っているうちに今度は小さいエリアに出た。

「ここまで逃げりゃ・・・あいつも来れないだろう。」

リーブルは呟く。

あたりを見るとそこにはアプトノスもいた。

「お前、無事だったか・・・。良かったぜ。」

リーブルはアプトノスの頭をなでる。

アプトノスはリーブルの姿を見ると安心したのかその場に座り込む。

「確か、上に行けって言うてたよな・・・。あそこか？」

リーブルが見た方向は少し高い場所にあった。

ベースキャンプを作るにはよさそうな場所だ。

「少し休んでから、あそこへと向かうか。」

リーブルは再び座り込む。

「俺もいつか・・・あんなモンスターが狩れるようになりてえ。」

リーブルは言った。

あの少年はいったい何者だろうか。

「ベースキャンプで待っていれば戻ってくるかな？」

リーブルは10分ぐらい休むとアプトノスを連れて、ベースキャンプへと向かっていった。

第3話 双剣使い、現る（後書き）

あのモンスターはジンオウガでした。
分かってましたか？

次回は少年の狩り編です。
感想待ってます！！

第4話 少年の実力

「あの子も行ったようだな。」

少年はベースキャンプの方向を見る。

しかし目の前のジンオウガが咆哮を上げる。

「あの子の前では威勢よく言ったものの・・・今のおれの持ち物と装備じゃキツイか？」

少年はポーチの中身を見る。

あるのは閃光玉、回復薬、携帯食料、砥石ぐらい。

後はいろんな実などが入っている。

「出来るところまで戦うか。」

少年は剣を抜く。

双剣は手数の方で主に對抗する。

そして一番の魅力が鬼神化による連続攻撃だろう。

ジンオウガがこちらに向かってくる。

少年はそれを横にうまく避けると、向き直る。

少年は双剣で斬りつける。

しかし浅くしか斬ることが出来ない。

「チツ、浅かったか。」

ジンオウガは攻撃などうけなかったかのように反撃をする。
しかしその攻撃は少年には当たらない。

「今度はもつと懷に踏み込むか。」

ジンオウガの攻撃後の一瞬の隙で懷へもぐりこむ。
そこで少年は1回転する。
今回は手ごたえありだ。

「よし、このまま行くか。」

続けて連続攻撃をする。

するとジンオウガは反撃をせず、その場に止まり反撃をしない。

「ここですか・・・。」

ジンオウガは周りの雷光虫を自分の体内に取り入れる。

そうすることにより、自分の力とするのだ。

その間に懷に潜り続けると、思わぬ放電を喰らうこともある。

「クソッ、早くしろよ。」

ジンオウガはまだ取り入れている。

ガンナーならこの隙に攻撃を叩きこめるのだが、剣士だと放電を喰らうかもしれない。

上級ハンターだとその隙やタイミングを見極めうまく攻撃をするらしい。

しかし少年はまだハンターを始めて1年半。中級ハンターだ。
ジンオウガと会うのも2度目である。

「行けるところまで行かないと・・・。」

ここに来た意味がないぜ!!」

少年は再び動き始めようとするジンオウガに向けて走っていく。

そして前に踏み出し、斬る。

しかしその攻撃は無残にも弾かれる。

恐らく当てる場所が悪かったのであろう。

「ダメか……。しょうがない、俺もキャンプに戻るしかなさそう
だ。」

少年は閃光玉を投げるとジンオウガが眩んでる隙にキャンプへ戻った。

第4話 少年の実力（後書き）

短くてすいません。

明日も更新する予定です。

流星のロックマンTFCのほうもよろしく願います。

感想待ってます!!

第5話 合流

リーブルはベースキャンプで少年の帰還を待っていた。
何もすることもないのでとりあえずベッドで転がっていた。

「あの子、どうなったかな？」

リーブルは途中で助けに入ってくれた少年のことを心配する。
自分を助けてくれたのに死んでしまったなんて事になったら申し訳ない。

幸い、閃光玉は所持している。足止めぐらいはできるだろう。
その間に逃げてもらえばいい。

「よし、助けに行こう。」

リーブルはベッドから体を起こす。

これから動こうとした時、あの少年がベースキャンプの入り口から歩いてくる。

「先ほどは助けてくれてありがとうございました。
無事だったんですね。」

「・・・そりゃあな。人を助け、自分が死ぬというのはよほどなドジだからな。」

「それもそうですね。」

リーブルは笑う。

しかしその少年に笑顔はなかった。

リーブルは少年の顔をまじまじと見る。

その視線を感じてか、少年はリーブルに尋ねる。

「・・・？俺の顔に何かについているか？」

「え！？い、いや別に・・・。」

「そうか。・・・。」

2人の間に沈黙が流れる。

こんな重い空気も嫌なので何か適当にしゃべる。

「その双剣、何て言うんですか？」

「ん？これはスノウツインズというものだ。
ウルクススの素材を使った双剣だな。」

「ウルクスス？」

聞いたことのない名前だった。

それもそのはず、ユクモ村の近くにある雪山ぐらいにしか生息していないからだ。

「お前は・・・装備を見るからにして初心者ハンターって感じたな。」

「あ、はい。つい2か月ほど前にハンターになったばかりですね。」

「なるほどな。では中型以上のモンスターを狩ったことは？」

ちなみにこの小説内では中型モンスターはドス〜といったモンスターの事である。

「まだありません・・・。」

リーブルはいつもそれを恥ずかしく思う。

いくらハンター2か月といってもジャギイ等小型モンスターしか狩れないと思われるのが嫌なのだ。

「分かった。じゃあ俺が同行してお前に初めての中型モンスター狩りをやらせてやろう。」

「え、本当ですか！？で、でもあのモンスターは？」

「あのジンオウガは代わりにハンターが来て狩ってくれるだろう。心配はいらん。」

「そうですか。それより本当に中型モンスターを？」

「ああ。ここで会ったのも何かの縁。そのぐらいはやってやろう。」

「ありがとうございます！！」

「よし、ではまずはユクモ村に行こう。」

2人の少年と1匹のアプトノスはユクモ村へと向かって歩き出した。

第5話 合流（後書き）

昨日更新できずすみません。

超がつくほど急展開ですね。そして短い・・・。

ちなみに双剣使いの少年の名前は次に出します。

次回は再びユクモ村まで歩きます。

感想待ってます！！

第6話 村へ行く理由

2人は溪流を出てユクモ村に向かって歩いていった。

「そういえば君の名前はなんて言うんだ？」

少年のほうから話しかけてくる。

「僕？そういえばいつの忘れてましたね。

リーブルっていいいます。」

「リーブルか。・・・良い名前だな。

俺の名前はミクリだ。」

「ミクリさん・・・これからよろしくお願いします。」

「さん付けはやめてくれ。ミクリで結構だ。リーブル。」

「・・・はい。ミクリ。」

「あとその敬語もだ。堅苦しいのは嫌いなんだ。」

「・・・わかった。」

リーブルは慣れるまでにしばらく時間がかかりそうだった。
人の名前を呼び捨てで呼ぶのは久しぶりだからだ。

「ところでリーブル、なんでお前はこの村に来ようと思ったんだ？」

「ぼ、僕？ちよつとした理由ですよ。」

「そのちよつとした理由が知りたいんだ。」

「分かりまし・・・じゃなくて分かった。」

リーブルはなぜ村に行くのか話すことにした。

リーブルはある1つの村を中心に活動していた。

活動と言っても上級ハンターでは簡単すぎる狩りの契約をしていただけだ。

しかしそんなある日のこと毎日が同じような生活をしていた時、一通の手紙が届いた。

「リーブルへ

あなたがハンターになったという話を商人から聞きました。

あんな小さかったあなたが狩人になる日が来るのは想像が出来ません。

さて、あなたはどのような生活をしているのでしょうか？

今、私のユクモ村は危機的状況にさらされています。

あるモンスターの襲撃によって村は壊滅状態。

ハンターはごく少数。

ハンターになつたばかりのあなたでも中級モンスターぐらいの依頼を回せると思います。

ぜひ、検討してみてください。

村長」

ジャギイなど小型モンスターしか狩ったことがない、しかも上級ハンターがいるこの村にいるより得策だと思ったのだ。それだけではない。

ユクモ村にいる友人の安否も気になったのである。

村長とも一応顔見知りなので行くことにしたのだった。

「なるほど、そのような理由か。ちなみにその友人の名前は何というのだ？」

「サーティっていうんだ。」

「サーティ……。俺も村長から手紙をもらってユクモ村に来てから1ヶ月経つがそのような名前の人と会ったことはないな。」

「そう。まあ、いいよ。俺の目的は一人前のハンターになることから。」

ところでミクリ。なんでハンターになろうと思ったの？」

「俺か？俺の家は俺が稼がないと暮らしていけないからな。俺が稼げると言ったらこれぐらいだったから。それぐらいだな。」

「そういう事か。ミクリも大変だったんだね。」

「ああ。だが俺もやっとここまで来た。

俺はもつと強くなって家族に楽をさせてやりたいんだ。」

「いい夢だな。」

リーブルもその話を聞いて、自分も夢を見つけないかと思った。しかし考えるが思いつかない。

「ユクモ村が見えてきたぞ。」

リーブルは顔を上げる。

そこには村があった。しかしそれは村と呼べるものなんだろうか。家は壊れ、門も半分ぐらいの破損、なにより瓦礫などがたくさんある。

「ひどいだろう？だがこれでも少しは片づけてたんだぜ。」

リーブルは啞然としていた。

第6話 村へ行く理由（後書き）

空白で稼いでしまいました。

そろそろ1話を長くしたいです…。

感想待ってます!!

第7話 到着、ユクモ村

リーブルは村の中へと入っていった。

一度この村に来たことがあり、その時にこの太刀を作ってもらった。

「あら、リーブルさん。お久しぶりです。」

礼儀よく挨拶してきたのはこの村の村長。

一度来たときに家を貸してくれ、また手紙をくれた張本人である。

「いいえ、前の村でもあまり依頼がなかったの。
この村のお役にたてれば光栄ですよ。」

「まあ。頼りにしてますよ！」

村長は言う。

頼りにしてると言われ、少し照れるリーブル。

「そうですね。前使っていたあなたの家、何とか修復したんですよ。
と言っても少しボロボロな部分もありますが。
そこを使ってくださいな。」

「はい。本当にありがとうございます。」

リーブルは歩き出す。

リーブルが前使っていた家。そこまで広くないが一応集会浴場まで
直通である。

まあゲームの主人公の家だと思ってほしい。

「懐かしいな、この家・・・。」

リーブルは家に着くとベッドにダイブする。
そしてそのまま寝てしまった。

- - - - - 2時間後 - - - - -

リーブルは目を覚ました。

ベッドから体を起こすとそこには荷物が置いてあった。
そういえばさつき、アプトノスを置いてここまで来てしまった。
誰かがここまで運んでくれたのだろう。

「この村も大変だろうに俺なんかのために・・・。」

リーブルは改めてこの村のために頑張らなきゃいけないと思った。
リーブルは15分ぐらいかけて荷物の整理を終えると、再び外に出る。

「村長にサーティのこと聞いてみるか。」

リーブルは村長を探す。

しかし村には村長の姿はなかった。

「村長も忙しいんだな。しょうがない、何か依頼でも受けるか。」

リーブルは集会浴場に入っていた。
集会浴場に入るとそこは熱気に包まれていた。近くに温泉があるのだ。

以前までこの村は温泉の観光地として有名だった。

しかし村が襲撃を受けてから、観光客がかなり減ったのだ。

「リーブルじゃないか。」

リーブルは声をしたほうを見る。

そこにはミクリがいた。

「何をしている？」

「いや、何か依頼がないかなって思ってたさ。」

「そうか。この前も言ったが中型モンスター狩りに行ってもいいが？」

「今からでもいい？」

「ああ。俺は構わない。」

「じゃあお願いするよ。受注しておいて。その間に家で準備してくるから。」

リーブルは家に戻っていく。

その後、ミクリはドスジャギィ狩りを受注した。

そして15分後。リーブルが戻ってきた。

「待った？」

「いや、ちょうど受注が終わったところだ。出発は今すぐできるぞ。」

「よし、じゃあ早くいくぞ。」

狩りをしたくてウズウズしているからな。」

「しかもお前にとって初の中型だからな。」

「ああ。ミクリ、サポート頼むぜ!」

「・・・ああ。」

いつの間にかリーブルはすごい上の立場っぽくなっていた。
こうして2人は集会浴場を出てドスジャギイがいる溪流へと向かった。

第7話 到着、ユクモ村（後書き）

リーブルのキャラが早くも可笑的ww

次回からようやくまともな狩りに入ります。
感想待ってます!!

第8話 VS ドスジャギィ その一

2人は1時間程度で溪流についた。

溪流はユクモ村からいける狩場の中で一番近く、一番多くの人を訪れるポイントである。

ジンオウガも今はどこかに行ってしまったらしい。

「おい、リーブル。とりあえず作戦会議をするぞ」

「作戦会議？」

リーブルは今まで人と狩りに行ったことはないので作戦会議などとはしたことが無かった。

リーブルはどういう事を話し合うのかなと思っていた。

「そうか、お前は他人と狩りをするのは初めてだもんな。

とりあえず簡単な狩りの方針を決めるだけだ」

「方針か。じゃあ、今回の方針は？」

「俺は一人でも狩ったことがあるからいざとなればどうにかなる。

だがお前は経験がない。ジャギィと思って甘く見てるといつの間にか体力を失っていることもある。

とりあえず回避を中心に自由に動いてみてくれ。俺はお前に合わせる」

「うん、分かった。拠点に戻るタイミングとかは全部任せるよ」

「りょーかいした。じゃあ行くか、リーブル」

「ああ」

2人は支給品を分けてポーチに入れるとベースキャンプを出る。
エリア1に出る。そこは大型モンスターや中型モンスターは入ることが出来ない。

ごく一部の小型モンスターしか出現しない。

「まずはエリア2だな」

ミクリがそう言ったのに合わせリーブルも動く。
今回は支給品の地図を持っているのでエリアも分かる。
2人はエリア2に出る。

「ここにもいないよ、ミクリ」

「じゃあエリア6だな。まあ焦らず行くぞ」

2人は今度はエリア2からエリア6に移動する。
エリア6に出る。そこは水が流れているエリアだ。
そしてそこには何匹かのジャギイを引き連れてドスジャギイがいた。
しかしまだこっちは気付いていないようだ。

「あれがドスジャギイ。一回り大きいな」

「ああ。まわりのジャギイも少し厄介だ。
俺はまずまわりのジャギイを殺る。お前はジャギイ達に警戒しつつ
ドスジャギイをけん制してくれ」

「分かった」

まずはミクリがドスジャギイ達のもとへと走っていく。
ミクリは一匹のジャギイに攻撃した。相手は完全にミクリの存在に
気付く。
次にリーブルも向っていく。

「ドスジャギイ、貴様の相手はこの俺だ」

周りのジャギイ達を避けドスジャギイを斬りつける。
ドスジャギイは反撃をするがリーブルは避ける。

「リーブル、周りをよく見ろ！！」

ミクリの怒声が聞こえる。後ろを見るとジャギイが1匹いた。
しかし幸いにもまだ攻撃はされてない。
ひとまず距離を取る。

「クソッ、厄介だな」

「落ちてけリーブル。まずはけん制するだけでいい。そんなに踏
み込むな」

リーブルは言われたとおりドスジャギイに一太刀入れて避ける。
周りのジャギイ達の攻撃は喰らわないように避ける。
ジャギイ達も何匹か倒れるが次々と仲間を呼ばれ増えていく。
ドスジャギイ自体には全然攻撃が出来てない。

「おい、ミクリ。このままじゃ時間が無くなるぞ」

「ああ。思ったより厄介だ。」

リーブル、お前はドスジャギイを中心にしてい。俺が捨て身でジャギイをひきつける」

「分かった」

リーブルはドスジャギイに斬りかかる。

周りのジャギイ達の攻撃がかすっているが気にしない。
気にしていたらきりがなからだ。この状態が4、5分ぐらい続いた。

「おい、リーブル。一度拠点へ戻ろう。

態勢を立て直すぞ」

「今!？」

「急げ!油断するんじゃない。このままじゃお前は確実に死ぬぞ」

「・・・分かったよ」

リーブルは剣を納刀するとミクリがいる方へ走っていく。

2人は体勢を立て直すため一度ベースキャンプへと戻るのだった。

第8話 VS ドスジャギィ その一（後書き）

適当に書きすぎました・・・
次回からは気を付けます

感想待ってます!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6705s/>

モンスターハンター ～栄光の狩人日記～

2011年10月8日21時45分発行